



ナガサキ ピース・タイムズ

発行者【THE PUBLISHER】
日本非核宣言自治体協議会
(にほんひかくせんげんじちたいきょうぎかい)
〒852-8117 長崎市平野町7番8号
長崎市平和推進課内
電話:095-844-9923 FAX:095-846-5170
E-mail:info@nucfreejapan.com
ホームページ:http://www.nucfreejapan.com

NAGASAKI PEACE TIMES

【非核協】おやこ記者新聞



8月9日、長崎市平和公園で行われた平和祈念式典に参列しました。

雨の中、会場には被爆者や遺族、世界各国の代表などたくさんの方が集まりました。私はまず会場の正面にある平和祈念像の想像以上の大きさ、力強い存在感に驚きました。式の中で鈴木長崎市長の平和宣言での「武力には武力を」の争いを今すぐやめてください！」と



いう魂のこもった訴えが心に響きました。原爆が炸裂した午前11時2分に、会場では全員が起立して黙とうしました。同じ時刻に会場の外でも、長崎中、日本中、海外からも、長崎を想って同じように黙とうしているたくさんの人達のことを想像して、平和な未来を祈る人々との一体感を感じることができました。

【斎藤心晴・寛子記者】

被爆80周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典

長崎から世界の人々と
平和を祈る

長崎は被爆80年目の夏を迎えました。今年は平和祈念式典のほか第11回平和首長会議総会も開かれました。9組のおやこ記者は戦争や平和について真剣に考えながら取材活動を行いました。【編集部】



楽しく暮らして平和に貢献

伊藤 武治さんの体験談

私は伊藤武治さんを取材しました。伊藤さんは4歳の時に爆心地から3・8km離れた自宅で被爆しました。玄関戸のガラスの破片が目の上に刺さり、お母さんに取ってもらったそうです。お母さんから「嘔んででもガラス片を取ってやろう」と思っていたと言われ、お母さんには頭が上がりないと思ったそうです。原爆は一瞬でたくさんの人の命を奪いますが、生き残った人達も白血病などの



癌になりやすいと聞き、とても怖いと思いました。伊藤さんの「自分の体を大切に、にこやかに楽しく暮らせることが平和に貢献できる」というお話



がとても印象に残りました。ぼくも自分や家族や友達を大切に、にこにこ楽しく暮らすことを心がけたいと思います。
【木下寧人・美穂記者】

毎日ごはんが食べられる幸せ

岩永 美美子さんの体験談

私は、岩永美美子さんを取材しました。岩永さんは1歳だったので、被爆当時の記憶はありませんが、両親から聞いた話と戦後大変だった話を教えてくれました。その中で一番印象に残ったのは、戦争が終わってからもずっと食べ物がなくお腹を空かせていたことです。たんぼなどの雑草やカエルを食べていたことを聞いて、私はいつも食べているおいしいごはんは食べられなかったのだ



と思いました。岩永さんは、戦争を他人事ではなく、自分のこととして考えてほしいと言っていました。まず私たちができることは、平和に暮らせることに感謝して、あまり好き嫌いを



しないようにすることだと思いました。
【草刈雪乃・恵記者】



80年前の昭和20年8月9日、原子雲の下に暮らしていた9名の被爆者。厳しい惨禍をくぐり抜け、原爆症や差別に苦しみ、戦後を生き抜いてこられました。その貴重な被爆体験をご本人に語っていただきました。



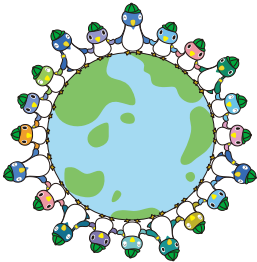
爆心地から2・9kmの大井手町の自宅で被爆した石橋哲さんにお話を聞きました。当時1歳だったため、その時のことは、後からご家族に聞いたそうです。その日、お母さんが昼食の支度をしていると、爆風で家の壁が落ちてきたそうです。幸いご家族の命は無事

でしたが、それからずっと大人になってからも、自分が被爆したことは分かっていたても、そのことを話すのはタブーだったため隠していたそうです。また、ご両親もそれを話しながらなかったそうです。被爆者は、戦後の社会で差別や偏見を受けたそうです。私はそれを初めて知り、被爆者の人達は何も悪くないのに、ひどいと思いました。石橋さんは16歳の時に、一家でブラジルに移住して、在外被爆者となりました。

【斎藤心晴・寛子記者】

知らなかった原爆の被害

石橋 哲さんの体験談



原爆被害者は日本人だけではない

金光子さん・金敬道さんの体験談



私は、韓国人の金光子さんと金敬道さんにお話を聞きました。お二人は長崎で被爆されましたが、外国人であることで差別的な扱いを受け、祖国である韓国に帰ってから身体をやけどが原因で周りの人から差別的な扱いを受けたそうです。「被爆した

ことは一切言ってはいけない」とお父さんから言われ続けたそうです。私は、今まで原爆の被害者は日本人だけだと思っていましたが、外国人の方々も被爆され身体被害だけではなく心の被害まで受けていたなんて知りませんでした。

お二人は「被爆者は日本人だけではない。外国人の被害についてもつと話題にしてほしい」「被爆二世である自分子どもにも補償を広げてほしい」と切に願っていました。
【小枝叶愛・克啓記者】

3歳で見ただいたい色の光

まつもと みとえ
松本 美都恵さんの体験談



3歳で被爆された松本美都恵さんにお話を聞きました。松本さんが疎開先の長与村(現・長与町)に向かうため、母におんぶされて自宅を出たのが午前8時半頃でした。途中、おばが勤める病院へ寄ってお昼ごはんの大豆を届けて、トイレを借りました。またおんぶされて、到着後に地面に下ろされた瞬間、一面だいた

い色の光を見たそうです。そのまま、お母さんに抱きかかえられて、水がめの側で、しばらくしゃがみこんでいました。その日、自宅に残っていたら…、出発が1時間遅かったら…。生きるも死ぬも紙一重という言葉が印象に残っています。松本さんのおばあさんが疎開先にたどり着くまでにすれ違う人は、みんな手から雑巾をぶら下げていたと不思議がっていたそうです。しかし、それは雑巾ではなく、焼けただれた皮膚だったそうです。戦争の悲惨さを、身をもって感じました。

「井之上たま子・由衣子記者」

核兵器をなくすこと 学ぶこと



はしもと とみたろう
橋本 富太郎さんの体験談



影響が表れ始め、怪我が治りにくくなったり、被爆から50年後に大腸癌になったりしたそうです。私はそのような影響があることを初めて知り、原爆の恐ろしさを感じました。

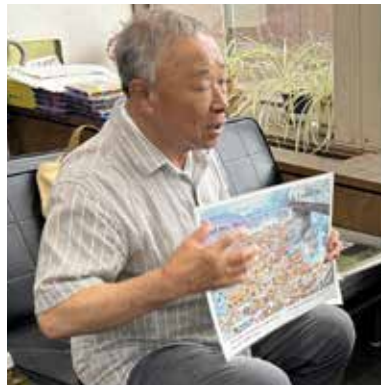
橋本さんは、被爆者は原

8月9日、橋本富太郎さんに被爆体験のお話を聞きました。1歳11か月の時に被爆しましたが、爆心地から離れていたので爆風で屋根がずれるくらいの被害だったそうです。しかし、徐々に放射線の

爆によって生きることや大切な人をなくしたと語り、これからの時代を担う私達に、核兵器をなくし、地域の良いところを守り無関係な人々を巻き込まないよう、色々なことを学んで話し合いで解決してほしいと話していました。

「與儀季子・杏記者」

池田 松義さんの体験談



私は、池田松義さんに取材をしました。小学2年生の7歳の時に、爆心地から700mで被爆し同居していた家族6人を亡くされました。最後に父が言った「水をくれ」という言葉は今でも忘れられないそうです。そ

して、「同年8月25日に亡くなった母親の温もりは、今でもずっと心の中にあります」と、目に涙をためながら話してくれました。幼くして家族全員を亡くし、そこからは必死で生き抜くことを考えてきたそうです。私の周りにたくさん家族がいることがどれだけ幸せなことなんだろうと、心から有難いことだと気づかされました。穏やかな世界をつくるという使命を果たせるように、しっかり考えていきたいと思いました。

「丸山結華・美華記者」

木口 久さんの体験談



私は、木口久さんにお話を聞きました。木口さんは80年前、爆心地より2・5km離れた大島町で5歳の時に被爆しました。戦時中は空腹が辛く、お母さんに「ひもじい、ひもじい」と何度も言っていたそうです。昭和20年8月9日、子ども達の

死の星になるかもしれない。被爆者もいずればゼロになります。若い人が話し合い、意識を高めて引き継いでほしい」と。今こそ私達が「戦争・原爆反対!」と発言する勇気を持つと心に決めました。

「新谷彩・春香記者」

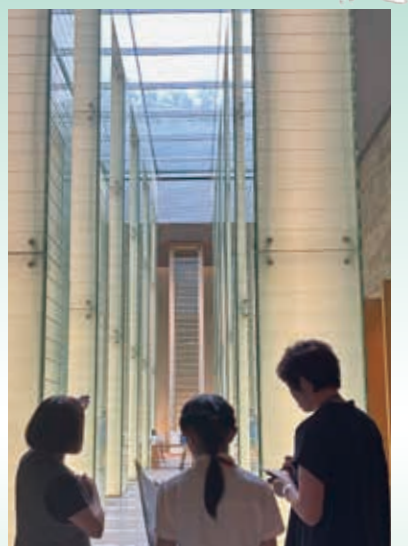
全ての人が「戦争反対!」
原爆反対!という勇気をもって



生きることと必死で考える人生

被爆者の想いに会える場所

国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館



この施設は、原子爆弾により亡くなられたすべての方々への追悼と、永遠の平和を祈念することを目的とし、平成15年に開館しました。

遺影・手記閲覧室には黒本と呼ばれる体験記や、証言音声、映像などパソコンを使って閲覧することが出来ます。また、追悼空間には原爆死没者の名簿が収められており、名簿棚の250m先、500m上空で原子爆弾が炸裂しました。館内には水を湛える水盤が7か所あり、心安らぐ水音もあります。これは、多くの被爆者が水を求めたことから配置されています。また、ボランティアによる朗読などもあり、様々な形で被爆者の想いを受け取ることが出来ます。原子爆弾によって引き起こされた、被爆者それぞれの物語を知ってください。

「竹田明連・薫記者」

名簿棚には2025年8月9日現在、205冊、201,942名の原爆死没者の氏名が掲載されている。



黒本に収集された内容の中には「思いだしたくないので書けません」といった文章も残っている。

原爆で生き残った「被爆樹木二世」の苗を世界に 核兵器廃絶に向けて戦争体験の継承

第11回平和首長会議総会 分科会

私は第11回平和首長会議総会の分科会を見学しました。テーマは「戦争体験の継承」でした。

冒頭で国連事務次長・軍縮担当上級代表の中満泉氏は平

8月9日、出島メッセ長崎で、第11回平和首長会議総会の分科会を見学しました。テーマは「平和教育」でした。世界の都市の代表が核兵器をなくす取り組みを事例発表しており、同時に通訳で聞きました。

和の文化を実現するために、芸術や文化は、すべての国境を越えて人々の心に響くもので、言葉だけでは引き継がれない心の反応により、人を巻き込む力があることを話されていました。異なる文化の国々が仲良くするた
できました。

加盟都市の事例発表には、ドイツ、マンハイム市、国立市、大牟田市、亀岡市の市長などが参加しました。国立市では全ての公立小・中学校で伝承講話を行っています。また、大牟田市は、今後、体験を語れる当事者が高齢化する中、聞き取り調査や資料収集の呼びかけに力を入れていくそうです。私もこの思いを伝え続けたいと感じました。

「丸山結華・美華記者」

東京都日野市は、平和の学びは小・中学校を卒業すると、その後の学びをつなげていくことが難しく、課題であると発表されました。マンチエスター市では、平和庭園（ピースガーデン）に、被爆樹木二世のイチヨウの苗を植えているそうです。私はこのマンチエスター平和庭園の取り組みは次世代への平和のメッセージを届ける役割を担っているのではないかと思いました。

木を育てるように、平和も市民みんなで枯らさないように育てていくことが大切だと学んだので、私も身近にできる平和活動をしていきたいです。



「井之上たま子・由衣子記者」

未来の平和

平和の輪で核兵器廃絶へ

オーストリア外交官 アレクサンダー・クメントさん

ぼくはオーストリア外交官のアレクサンダー・クメントさんに取材をしました。クメントさんは核兵器廃絶などの重要な問題に取り組み、世界をより良くしていくために、外交官になられたそうです。

核兵器廃絶はとて大きな問題であり、実現するためには自

輪ができて、核兵器廃絶の一步になると話されました。

被爆80年。世界で核軍拡が進んでいて、危険な状態にあります。ぼくは、核兵器の問題がなぜ重要なのかを理解し、それを友人に伝え、ゆくゆくは世界の人に伝え、二度と原爆が使われないことを願います。

「木下寧人・美穂記者」

若い世代へ伝えたいこと

マレーシア元首相 マハティール・ビン・モハマドさん

8月9日に行われた「青少年ピースフォーラム」に特別講師のため来日されたマレーシア元首相のマハティール・ビン・モハマドさんに取材をしました。

マハティールさんは、日本の元号でいうと大正14年生まれの現在100歳ですが、今も世界中で活動されています。選挙

本人のいいところをお手本にしたものだそうです。

講演会では、「戦争は犯罪だということ」を次の世代へ伝えていくこと、暴力ではない方法で紛争を解決していくことが大切だ」と訴えていました。私もお話を聞いて、マハティールさんと同じ気持ちになりました。

「草刈雪乃・恵記者」



映画『長崎一閃光の影で』

映画監督 松本 准平さん



私は映画『長崎一閃光の影で』を製作された映画監督の松本准平さんにお話を聞きました。

松本さんは作中で被爆した看護学生が友人達に「罪を赦す」と言い喧嘩になった場面について、「やられたらやり返す」では永遠に誰一人として幸せになれないという



くの方に声を届けてほしい」と願っているとのことでした。

私は松本さんから原爆の話を聞き、「二度と戦争をしてはいけない」という決意のもと、身近な友達から一人でも多くの方に伝えたいと思います。

「小枝叶愛・克啓記者」

平和への第一歩は、隣の人に話をする事

核兵器廃絶日本NGO連絡会 浅野 英男さん



8月9日、長崎原爆資料館で浅野英男さんにお話を聞きました。浅野さんは核兵器廃絶日本NGO連絡会事務局職員で「核兵器をなくす日本キャンペーン」を発足し、2030年までに日本が核兵器禁止条約に加わることを目標に活動をしています。代表者は昨年度ノーベル平和賞を受賞した日本被団協の田中熙巳さんです。活動する中で一番大変なことは、若い人に関心を持つってもらうことです。浅野さんは対話会やイベントを開催し、

いいわけじゃない。多くの人がみんなで力を合わせることでよくなっています。そのはじまりは自分の隣の人に話をするということです」と、これからの子ども達へのメッセージをいただきました。

私も早速、今日聞いたことを弟に伝えたいと思います。より良い未来を大好きな人たちと思い描いていきたいです。

「新谷彩・春香記者」

国会議員討論会や国際会議にも出席されました。

浅野さんから「ここで聞いたこと、学んだことをぜひ家族や友達に話してほしい。核兵器だけでなく社会をより良くしていくには、誰か一人が頑張っていれば

みんなで考えよう



#核廃絶 誰でもできる世界平和へのアクション



ICANは2017年にノーベル平和賞を受賞されました



メリッサ・パークさんは「核兵器の存在は私たちみんなに責任がある」とし、小さくても自分の声や行動を起こすことが前進の力になると教えてくれました。

「竹田明連・薫記者」

核兵器廃絶国際キャンペーン(ICAN)事務局長メリッサ・パークさんの非人道性を訴え、世界の核兵器廃絶に向け活動をしています。「被爆者の方々は、二度と自分たちのような想いをしてほしくない」と、辛かった体験を語っています。その声に耳を傾け、世界に発信していつてほしい」、そして「人間が造った核兵

器は、人間がなくなることができると断言していたメリッサ・パークさんは「話し合い、お互いを尊重することが大事」と話していました。また原子爆弾の使用は日本だけではなく、これまで2千回もの核実験が行われ、世界中で被害を受けている場所や人がいるそうです。

核兵器廃絶国際キャンペーン(ICAN)事務局長メリッサ・パークさん

新たな平和と希望の象徴に

アメリカカトリック巡礼団



私は、アメリカカトリック巡礼団のみなさんにお話を聞きました。80年の節目に被爆2世の森内浩二郎さんからの提案により、カトリック信者からの寄付で浦上天主堂の鐘が復元されました。巡礼団の方々は復元された鐘の音を聞いた時、サイレンの音の怖さと、平和と希望を象徴する鐘の音が重なり、新たな意

を感じるそうです。

被爆者が少なくなる中で長崎の記憶をどのように次世代に繋げていくか、継承の仕方を世界で考えていくことの大切さを感じました。



「與儀季子・杏記者」

味を持つことを感じたと話していました。

アメリカでは、原爆がもたらした被害について話を聞く機会が少ないそうだが、今も世界では防

ぐことのできる戦争が続いており、映像

令和7年の夏 長崎・広島への 原爆投下と 終戦から80年

「戦争」と「平和」について、 私たちの住む地域で 調べ、学び、考えました

北海道
代表

北海道 釧路町

草刈 雪乃・恵 記者



角田憲治さん

釧路空襲

～8歳で体験した角田憲治さんの話を聞いて～



釧路市立図書館の釧路空襲に関する展示。
左手前は被弾した幣舞橋の橋桁

橋を渡り、山の方へ逃がたそうです。橋は欄干がボロボロになり、機銃で撃たれた人がたくさん倒れていたと言っていました。今はきれいな橋なので私はとても驚きました。いつまでも平和が続いてほしいです。

東北
代表

山形県 米沢市

竹田 明連・薫 記者



来次房子さん

戦時中の米沢を知るため、来次房子さん(102歳)にお話を聞きました。万世地区には飛行場があり、在郷軍から学生、女子学生まで飛行訓練が行われていました。房子さんは軍人さんの行き来や、誤って墜落してしまった飛行機を見ていたそうです。

辛い時代を乗り越え、現代にエール！



飛行場建設に携わった、地元青年団の名前が刻まれた石碑
※在郷軍とは普段は別の仕事をしていて、戦時に招集されるの軍人の隊のこと

薫さんは戦地へ。その後レイテ島の戦いで亡くなっていました。房子さんはどんなに苦しくても、お国のためにと歯を食いしばり一生懸命生きてきました。「現代の子どもたちは、辛いことも諦めず頑張っている」と話していました。

関東
代表

茨城県 神栖市

丸山 結華・美華 記者



予科練平和記念館

私は兄と母と、茨城県阿見町にある予科練平和記念館に行きました。そこで、一番印象に残ったのは、予科練に入隊する志願理由でした。「家が貧しいから家族のために」「無償で教育が受けられるから」

家族で考えた「平和」と「命」の大切さについて



旧土浦海軍航空隊跡の石碑
※予科練の正式名称は「海軍飛行予科訓練生」

「かつこいい飛行機に乗れるから」などでした。当時の予科練生と違い年くらいの兄達は、どうしても理解できないと驚いていました。また、予科練生の家族への手紙も印象的でした。それらを読んで、私はとても胸が苦しくなり、決して戦争はしてはいけなと強く思いました。

畿
代表

大阪府 八尾市

小枝 叶愛・克啓 記者



模擬原子爆弾投下跡地の石碑

私は大阪市のピースおおさか映像ブースで龍野繁子さんの証言映像を観て『模擬原爆』というものを知りました。

原子爆弾は広島と長崎に投下され数十万人の命を奪い、放射線の後障害で多くの人々を苦しめていることは知っていましたが、私

大阪を襲った模擬原爆



ちの住む大阪にも原子爆弾の投下訓練として核物質を積んでいない爆弾が投下され死傷者が出ていることを初めて知りました。

私は、龍野繁子さんの「天災は人間の手で止められないが戦争は人と人の事だから話し合いで解決すべき。それが出来てこそ人間」の言葉を忘れません。今も世界中で起きている紛争が終息し、戦争のない平和な世界になるよう願います。

中部
代表

山梨県 甲斐市

斎藤 心晴・寛子 記者



浅川保さん

私は自分が住む山梨県でも空襲があったと知り、とても驚きました。

昭和20年7月6日深夜から7日未明にかけてあった甲府空襲は「たなばた空襲」とも呼ばれ、一晩にして多くの人の命を奪い、街は焼け野原になってしまったそうです。

甲府市にある山梨平和ミュージアムでは、甲府空襲で亡くなった1,127名全員の氏名等を記したパネルや被災図、投下された焼夷弾の一部、甲府にあった軍隊や日本と外国との戦争の歴史について

過去を知り 未来を平和に

て展示しています。それらを、理事長の浅川保さんが丁寧な解説してくれました。

浅川さんが「空襲の被害についてだけでなく、そこに至るまでの日本の戦争の歴史についてもしつかり知ってほしい。戦争というのは一度始まってしまえば、やめるのが難しくなってしまうんだ」と話していたのがとても心に残りました。

6年生になると、学校の授業で歴史の勉強をするそうです。私は戦争が怖いので、正直そのことをあまり考えたくありませんが、未来に同じことが起きないように、その歴史から目をそらさずしっかりと勉強しなくてはいけないと思いました。

2025(令和7)年。長崎は1945(昭和20)年8月9日の原爆投下から、80回目の夏を迎えました。今年の日本非核宣言自治体協議会(非核協)主催のおよこ記者には、全国から107組の応募があり、抽選で選ばれた9組18名の親子に参加していただきました。

- 1) 戦争を体験した方に話を聞いて考えたこと
- 2) あなたの住む地域にある平和資料館等の施設を訪ねて学んだこと
- 3) あなたの住む地域で平和を伝える活動をしている人について学んだこと
- 4) 家族で考えた「平和」と「命」の大切さについて

からひとつを選択し、記事にまとめています。

【編集部】



四国代表

高知県 高知市

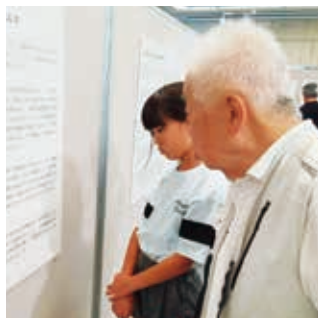
井之上 たま子・由衣子 記者



岡村正弘さん(右)

高知大空襲のお話を聞いて

「遺体が物のようにトラックに積まれて、その扱いが雑で腹が立った」という岡村さんの言葉が印象に残っています。私は、家族をそういつた失いかたをするなんて想像もできません。戦争のない世界にするにはどうすればいいか、これからたくさん学びたいと思います。



中国代表

広島県 熊野町

新谷 彩・春香 記者



山瀬潤子さん

子どもたちに考えてほしい

体を引きずる人に兄が水を渡すと「水をやるな!死ぬぞ」と憲兵が言いました。火傷の父を看病すると蛆が湧いていました。兄が箸でそれを取りました。山瀬さんは「原爆ドームを残して、いつまでも子ども達に戦争と平和について考えてほしい」と言っていました。



山瀬さんがくださった手作りの折り鶴。インタビューを受けるたび配っている。

沖縄代表

沖縄県 石垣市

與儀 季子・杏 記者

私は、八重山平和祈念館を訪れました。沖縄の戦争といえば地上戦が思い浮かびますが、八重山では、軍命によるマラリア有病地への強制避難によって、多くの住民が命を落としたそうです。このことを『戦争マラリア』といいます。中でも波照間島の人々は、



『戦争マラリア』を知っていますか?



八重山平和祈念館の展示物

島民の99・8%が罹患し、約3人に1人が亡くなったという話を聞き、家族や友人を失い、耐えきれないくらいの悲しみだっただろうなと思います。同じ日本人である軍の命令により、間接的な戦争の被害で犠牲になった人々がいた事実を胸に刻み、これからも平和について学び続けたいです。

九州代表

長崎県 諫早市

木下 寧人・美穂 記者

ぼくは「長崎被災協・被爆2世の会諫早」取材しました。昭和20年8月9日、長崎に原子爆弾が投下されたから、被災した人達を救援列車という列車を使って、動ける人は自力で、動けない人は木の板に乗せて病院に運んだそうです。同団体は、その救護体験を紙芝居にし、小学校



「長崎被災協・被爆2世の会諫早」のみなさん

救護列車から学ぶ戦争の怖さ



山下豊子さん制作の紙芝居

や中学校で読み、戦争の恐ろしさを伝えていきます。紙芝居を制作した山下豊子さんは「子ども達が平和に関心を持ってくれると嬉しい」と話していました。ぼくも紙芝居を見て怖いと感じましたが、実際に戦争が起こって怖い思いをすることがないよう平和が続いてほしいと思いました。



会長のことは

皆さん、こんにちは。会長の長崎市長・鈴木史朗です。
今年は、私が8月7～10日に長崎で開催された平和首長会議総会に出席したこと、また8月11日は親子記者報告会が大雨のため中止になったことに伴い、お目にかかることができませんでした。しかしながら、被爆80年の節目の年に、被爆者をはじめ、世界的に有名な核軍縮の専門家や指導者の皆さん取材する貴重な機会をもつていただけたことを大変嬉しく思います。
皆さんは被爆者や戦争体験者の声を直接聞くことができる最後の世代です。ぜひ、お住まいの地域の体験談を聞き、周りの人に伝え、話し合ってみてください。ともに平和をつくる仲間として、その輪が今後大きく広がっていくことを期待します。



事務局だより

被爆80年の節目の年を迎えた今年、皆さんには被爆者や国内外の平和活動を行う方などに取材を行っていただきました。
国際情勢の悪化により、再び核兵器が使用される危機が高まっている今だからこそ、それを暴力や脅しで解決しようとする「戦争の文化」ではなく、相手を尊重し、対話や共感によって解決する「平和の文化」を育てていくことを大切にしてください。
山本 穂花

北海道
釧路町
草刈 雪乃・恵 記者

私たちの世代が原爆の悲惨さを伝えます



原爆資料館で背中をやけどした谷口さんの写真や真っ黒のお弁当箱を見て原爆の悲惨さを感じました。
また、被爆者とお話ができ、とても勉強になりましたし、改めて戦争はしてはいけなと思っています。
戦後80年を迎え被爆者の方も高齢なので親子記者事業で体験したことを私たちの世代が伝えていきたいです。

北表
山形県
米沢市
竹田 明連・薫 記者

核兵器のない世界をみんなの手で



ICAN事務局長のメリッサ・パークさんを取材して、原子爆弾の恐ろしさや、80年前に終わったことではなく、今もなお続く苦しみや脅威を知りました。私は原爆資料館や浦上天主堂、山王神社二の鳥居、被爆したクスノキなどを巡り、もう二度と原子爆弾が使用されないような世界になってほしいと強く願いました。

東表
茨城県
神栖市
丸山 結華・美華 記者

伝承することが私の使命

今回参加して、当事者の生の体験を耳にして、核兵器による放射能の本当の恐ろしさを知り、とても怖かったです。本などで知っていた事実より、語っていた言葉の葉の一つ一つが深く心に響きました。この貴重な経験を家族や友達、自分



中部表
山梨県
甲斐市
斎藤 心晴・寛子 記者

原爆の被害が二度と起きないように



これまで戦争の本質は読んだことがあっても、原爆のことはあまり知りませんでした。今回長崎で、原爆の被害はその時だけでなく何年も経ってから出てくるものもあること、一瞬で多くの人の命や日常を奪ったことを知り、とても残酷だと思いました。同じことが二度と起きないように、核兵器のない世界になってほしいと思いました。

畿表
大阪府
八尾市
小枝 叶愛・克啓 記者

重みを感じた長崎発信の言葉



平和宣言での「長崎を最後の被爆地に」や平和への誓いでの「絶えぬ」の言葉に重みを感じました。
今回、被爆された方や未来の平和のために活動されている方への取材を通じて、私も生まれ育った大阪の地で少しでも核兵器の怖さを発信していきたいと思いました。

国表
広島県
熊野町
新谷 彩・春香 記者

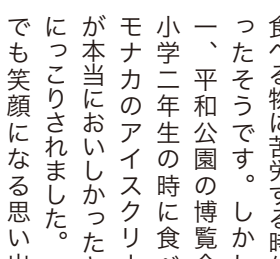
戦争反対！核兵器反対！訴えることを諦めない



高祖父は、黒い雨の中救護隊員になり原爆症で亡くなりました。曾祖父は被爆者でした。
「戦争反対！核兵器反対！」と諦めず訴え続けます。

国表
高知県
高知市
井之上たま子・由衣子 記者

救われた松本さんの笑顔



私が取材した松本さんの話によると、幼いころは、食べるものに苦労する時代だったそうです。しかし唯一、平和公園の博覧会で小学二年生の時に食べたモナカのアイスクリームが本当においしかったと、につこりされました。一つでも笑顔になる思い出を聞かせてもらい、私も救われる思いがしました。

州表
長崎県
諫早市
木下 寧人・美穂 記者

おやこ記者を通して学んだこと



廃絶のために長崎から平和の輪を広げて、長崎を最後の被爆地にできたいと思います。核兵器廃絶は大きな問題ですが、アレクサンダー・クメントさんから子どもにもできることがあると言われ、勇気づけられました。これから家族や友達、地域の人に核兵器の恐ろしさを伝え、みんなで核兵器をなくしていきたいと思っています。

縄表
沖縄県
石垣市
興儀 季子・杏 記者

平和について話し合うことが第一歩！

私は、長崎に来て改めて原爆の恐ろしさや平和な日々のがたさを感じました。
被爆者の話から戦争の影響がこんなにも長く続く苦しみや、カトリック巡礼団の方々のように離れていても同じように平和を願う人達のいる心強さを感じる取材活動になりました。平和な世界をみんなとつく



学生ボランティア7名がおやこ記者を全力サポート!!



様々な大学から学生が集い、今年も親子と一緒に取材、記事の作成・編集をしました。

改めて自分ごととして原爆を考える機会となりました。
純心大学4年 北村 真琴

熱心に学ぶ姿から、平和への想いが広がるのを感じました。
活水女子大学4年 下田 ひかり

長崎で平和を考える親子の真剣な姿が印象的でした。
長崎大学3年 庄司 美咲

子どもと同じ目線で平和を考える貴重な経験でした。
長崎大学3年 高良 諒

「伝える側」としての意識に頼もしく感じました。
明治学院大学3年 羽山 嵩裕

幅広い世代で平和を考える素敵な時間でした。
安田女子大学3年 盛根 梨央

次世代に平和をつなぐ活動に参加でき良かったです。
長崎大学2年 村上 貴文

直に被爆者が親子に伝えられる姿、優しさや迫力がありました。
ピースバイピースナガサキ 前田 真里